

文 献 紹 介

69-1 表示用処理装置の設計について

T. H. Myer, I. E. Sutherland: On the Design of Display Processors [CACM, Vol. 11, No. 6, June, 1968, pp. 410-414] key: computer graphics, display processor, system design

SDS-940 タイムシェア計算機システム用のディスプレイの設計に際し、ディスプレイジェネレータは、良質のものが市販されているが、ディスプレイプロセッサには、満足なものがないことが判明し、自力で設計することにした。プロセッサは計算機自体に類似してゆき、プロセッサにさらに副のプロセッサを付加したくなった。ディスプレイプロセッサの設計は、はてることのない輪廻の流転にもなりえ、われわれの経験が涅槃へのみちびきになることを希う。

1957年ごろの TX-0 ディスプレイや、1960年ごろの PDP-1 の DEC Type 30 は、座標情報から点をプロットするものであった。中央処理装置が計算をすると、図形がちらついた。リフレッシュのために、計算機はほとんど使用できない状態にあった。そこでデータチャンネルをつけて、ワードカウント 0 までコア中のディスプレイファイルをプロットするようになった。線と文字の表示がしたくなって、 Δx , Δy 情報や文字がディスプレイファイルにはいるようになる。輝度用コード、ビームの移動を輝線にするかしないかのコードが追加される。さらにチャンネル停止コードもつく。ジャンプ命令でリフレッシュが自動化され、連続してないファイルもあつかえるようになった。サブピクチャのため、データチャンネルにサブルーチンジャンプをつけた。これが輪廻の一回転で、データチャンネルからプロセッサへ進化する。

ディスプレイの x , y レジスタをアキュムレータ、ディスプレイアドレスレジスタをプログラムカウンタとして、単能計算機とした。その命令は load immediate and flash, add immediate and flash, halt, jump, subroutine jump, store subroutine exit.

マルチディスプレイプロセッサを考えると store exit は問題があり、サブルーチンネストをデバッグするにも、かえり番地がスタックにはいるのがよい。

一方、プッシュボタン、キーボード、ライトペンヒットやエッジバイオレーション用レジスタやフラグが

ついた。同時に、テスト用命令が用意され、主計算機なしに利用者とインタラクトできるようになった。また、透明なサブルーチン用として、 x , y レジスタもスタックできるよう工夫され、サブルーチンへのパラメタうけわたしのため、スタックポインタが可変となった。グローバルパラメタのために、アドレスプルのロード、ストア命令が追加された。これらの命令により、いままで主計算機でやっていた「ゴムバンド直線」その他がディスプレイプロセッサでできるようになった。プロセッサはあくまでも、ディスプレイ用である。プロセッサはかなりひまなので、リフレッシュもさせたい。そこでチャンネルがつけたくなる。そのチャンネルに複雑なデータ構造が読めるようコマンドがつけたくなる。ディスプレイプロセッサにローカルメモリーをつけても、同様な輪廻になったであろう。

ディスプレイプロセッサは、どのくらい主計算機に密着すべきか、またどのくらいの計算能力を持つべきか。遠近さまざま利害があるが、わけわれは主機のちかにおき、メモリーを共用するのがよいと思う。特にプログラムシステムのデータと絵のデータが混合できる利点がある。

遠方設置の場合の計算能力は、利用法でさまる。絵が比較的静的で、ゆっくりのサービスも我慢できるなら、計算機能は不用である。反対に強力なインタラクションを希望なら、ディスプレイプロセッサに、さらに独立なチャンネルが必要となる。諸条件からしかしチャンネルはプロセッサと一体のものでよさそうであり、利点もある。ベルテレフォンの Graphic II は独立チャンネルをもつが、コマンドは計算機でインタプリートしてもらおう方式である。

メモリー共用の近距離のディスプレイシステムはどのくらい複雑にするか。ディスプレイプロセッサのジョブの種類は、(1)単純なフォロー、(2)計算で絵をつくる。(3)利用者との高度なインタラクション、(4)高レベルのデータ構造からのピクチャコンパイルがある。(1)は計算能力不要。(2),(3)については計算能力がすぐ利用できれば、主機、ディスプレイいずれにあって可。(4)はディスプレイプロセッサの範囲外で主計算機の守備範囲であり、この決定からストアの命令をはずすことにし、輪廻の流転から脱することができた。(和田英一)

 書 評

高等函数表 第2版

林 桂一著, 森口繁一増補: 岩波書店

1967年11月15日第1刷発行, pp 384, ¥ 1,800.

(函数表について, ここで説明の必要はなからう.)

本書の初版は, 昭和16年2月5日に発行され, 広く愛用されたものである。それが, いかにか優れたものであったか, また, その改訂増補までのいきさつなどは, 本書の始めの部分に興味深く述べられている。

本書は, 収載している函数の種類, 引数の範囲とキザミを初版に従うという原則の他は, 全く新しい構想によって作成された近代的な函数表である。

そこで, この書評では, “高等函数表の初版”を原著とよぶことにする。本書と原著とを対照してみると, 本書が単に版を重ねるという意味の“第2版”を超えたものであることがわかる。

原著冒頭にある内挿公式は, 近代的に整理されて, 補間係数表としてまとめられている。本書の読者は, ヒマな時に, この一部(2ページ)を熟読しておけばきっと役立つに違いない。

本書と原著とでは, 収載している函数の分類の仕方が多少異なっている。原著は

第一類 圓及び雙曲線函数

第二類 Gamma- 及び球函数

第三類 Bessel 函数

第四類 楕圓函数

第五類 雑数表

となっているが, 本書は分類を新たにし

A 初等超越函数

B 初等函数の積分

C Legendre 多項式と Bessel 函数

D 楕圓積分および楕圓函数

E 雑数表

F 補間係数表

G 早見表

となっている。原著の表は42種であるが, 本書は若干の新しい表を加え, また原著の表を見やすく分割したため, 表の総数は73種になっている。

本書の表の精度は大体10ケタ強で原著よりもかなり高い。また新しい函数表——たとえば角度で引く三角函数表, 立方根・平方根の表, 正弦積分・余弦積分の極値, その他, $\tan \pi x/2$, $\operatorname{arccosh} x$, 累乗表などが追加され, 一層便利になった。原著は, ページ数を圧縮するために表の配列が不自然を感じる部分もあったが, 本書では見易い配列になっている。

本書と原著との間には四半世紀の年月がある。原著で使われていた漢字は簡略化され, カタカナは平がなへ変わった。 $\sin x$ などドイツ文字の函数も $\sinh x$ へ表現が変わった。面白いのは, 小数点が原著ではヨーロッパ風のコンマ(,)になっている点である。

原著で採録している“誤差函数”に代わって, 本書では, 使用頻度の高い“標準正規分布・累積分布函数”の表が登場している。これも時の経過の影響であろう。

なお, 原著の緒言を本書に収録の際, 一部の活字が現代風に変更されている。大したことはないが, これはあくまで原形のとおりであってほしかったと思う。

本書の最大の特長は, 数表はすべて電子計算機によって作成され, 校正(パンチミスなどの排除)にも, できるだけ電子計算機を使っており, 極めて信頼度の高い数表だということである。

有用な諸公式が, 全部で21ページ分あるが, その部分についても校正は念の入ったものである。

本書が, プログラミングの作成などをはじめとしてチーム力で短期間に作られたことに新しい行き方が感ぜられる。

その他, 細かい点でも工夫が行届いている。表の各ページに補間についての手引きがあること, 縁(へり)索引があって引きやすいこと, しおりが2本あること, 目うつりを避ける定規があることなど。また数表案内(2ページ)も有用である。

原著をまだ使ったことのない人も, 原著に親しんだ人々も, 本書を手にとられることをすすめた。

(石井 康雄)

ニ ュ ー ス

IEEE 国際パターン認識研究会, オランダ
で開催さる

IEEE 主催の国際パターン認識研究会 (IEEE International Workshop on Pattern Recognition) が, 去る 8 月 12 日から 16 日まで Holland の Delft で開催された. この研究会には, 11 箇国から約 80 名が参加し, わが国からは南雲仁一教授 (代表委員, 東大), 合田周平氏 (東大生研), および渡辺貞一氏 (東芝中研) の 3 名が招待された. この会の運営委員は Dr. A. S. Hoagland, Dr. C. K. CHow, J. H. Giskes, A. Hamburg, Dr. L. Kanal, Prof. A. Rosenfeld, Prof. B. Widrow の 7 名, また, 各国代表の委員は, Prof. E. R. Caianiello, Prof. D. Gabor, Prof. J. C. Levy, Prof. Nagumo, Prof. A. Rosenfeld, Prof. K. Steinbuch, Prof. Verhagen のメンバーであった. この会は, 近年盛んになった少人数, 非公開の形式をとり, Informal でかなり自由な会となった.

発表を内容的に見ると, パターンの前処理では, パターン (染色体) の skelton 化. (Grasselli), on line X 線写真の改良 (Pfeiler), 等 5 件ほど発表があり, 特にイタリアを中心に研究が進みつつある印象を受けた. 特徴抽出は, 学習による特徴の抽出 (Coombs) 以外問題がむずかしいこともあって, 進展していない感じである. 識別問題は, clustering や learning の問題とも関連するが, nonlinear な discriminant surface を nonparametric に決定する問題を取り上げている (Roelants, Ho, Patrick).

文字認識装置としては, 特定活字 (ISO-A) を高速に読み取る方向 (3,000 字/秒), 多種活字を読み取る方向, および手書数字を読み取る方向の研究, および装置の紹介が行なわれたが, OCR は用途を明確に定めた実用機の段階にはいった感が強い. 一般図形の処理では, 泡箱写真の解析 (Nagel), 指紋の分類 (Grasselli), Holophone (Higgins) 等の紹介があり興味を引いた.

その他, バイオニクス関係 (Aida, Levy 等), メモリー (Caianiello) 等の話しがあったが, 音声関係の紹介がほとんど無かったのが印象的であった.

この Workshop は 3 年に 1 度開催されるが近い将

来, わが国でも開かれることを期待したい.

ICC 事務局長来日

さる 11 月 5 日 (火) 国際計数センター (ICC-IBIT) 事務局長リオネロ・A・ロンバルディ氏 (Mr. Lionello A. Lombardi) が「日本における情報工学の動向を調査し, あわせて日本国内における国際計数センターの理解を深めるため」来日されたのを機会に, 文部省第 2 特別会議室において, つぎの議題により, 正式懇談会が開催された. 情報処理学会からは出川会長および安藤常務理事が出席し, 活発に意見を交換した.

1. ICC の紹介
2. 日本における情報工学の発達
 - 1 序言
 - 2 私企業および銀行の自発
 - 3 コンピュータ開発のための政府の助成
 - 4 コンピュータの輸入に関する政策
 - 5 大学における状況
 - 6 海外市場と国際協力
 - 7 日本におけるコンピュータの利用状況
3. 教育
 - 1 大学および高専における教育
 - 2 私企業および各種学校における教育
 - 3 外国人の教育
4. 日本と ICC の関係
 - 1 現在の関係
 - 2 ICC が日本に対してサービスを提供できる分野について
 - 3 ICC と連絡を保つべき日本の関係者について

出席者はコンピュータに関連ある学識経験者, 各省庁関係者, 外部団体, 学会等関係者および文部省側関係者等約 40 名に及び, 午前 10 時より午後 6 時過ぎまで, 討論ないしは状況説明が行なわれて, なかなか有意義であった.

東京言語研究所で第 3 回理論言語学国際セミナーを主催

東京言語研究所主催の第 3 回理論言語学国際セミナーは, 8 月 22 日 (木) から 28 日 (水) まで (日曜を除く) 1 週間にわたって東京・三宅坂の社会文化会館

で開催された。講師には構造主義の立場から、一般言語学の分野で活躍しているユーゴスラビアのノビ・サド大学教授 Milka Ivić 博士と、言語地理学、一般言語学の研究で著名な同大学教授 Pavle Ivić 博士が招かれた。

セミナーは毎日、午前、午後にわたって開かれ、午前中は夫人の Milka Ivić 博士による“General Syntax in Europe, Nowadays”と題する講義と質問にあてられた。これは、ヨーロッパにおける言語学界の現状を、チョムスキーの生成文法論に関する諸研究を中心に論じたもので、なかでも東欧圏におけるスラヴ諸語との関連で行なわれつつある研究の紹介が注目された。午後は Pavle Ivić 博士により“The Place of Prosodic Phenomena in Language Structures”（4日間）および“The Nature of Linguistic Differentiation”（2日間）の2つのテーマで講義が行なわれた。テーマの前者は、言語構造においてアクセントの占める位置を主として論じたもので、後者（言語差異の本質は、1つの言語の時間的・空間的変容に関する体系的な分析方法を展開したものである。

セミナー終了後は、ひきつづいて8月29日から31日まで、東京言語研究所において両博士への質疑応答と Pavle Ivić 博士を中心としての日本語方言の観察が行なわれた。

また、両博士による公開講演会が、8月22日（金）午後6時から、東京・有楽町の朝日講堂で開かれ、Milka Ivić 博士の“Semantics in Syntax and Syntax in Semantics”（邦題＝ことばの構造と意味論）、Pavle Ivić 博士の“Language in Space”（空間における言語）の2つの講演が行なわれた。これらの記録は、雑誌「ことばの宇宙」1968年11月号に掲載されている。



レセプション会場における服部四郎教授夫妻と Milka & Pavle Ivić 夫妻（中の2人）

セミナーには、一般言語学、方言学、英語学など各分野の研究者60余名が参加した。両博士は9月上旬、関西各地を旅行ののち9月14日に離日した。

科学用・制御用小形電子計算機 TOSBAC-3000 を開発

東芝(株)では、このほど従来の科学・技術計算用の TOSBAC-3400、制御用の TOSBAC-7000 シリーズ双方の下部機種として全面的に IC 化された小型の TOSBAC-3000 を開発した。

<特長>

1. 広い応用面

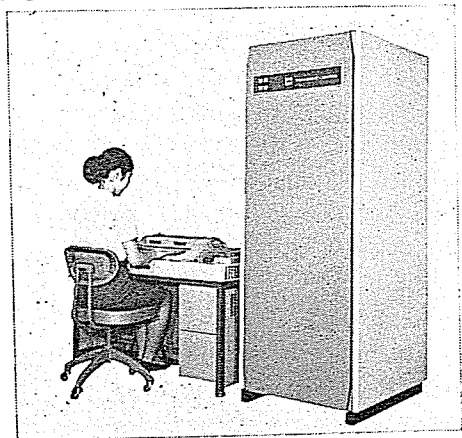
- 科学・技術計算用——2台の端末タイプライタをタイムシェアで働かせるファイル処理システム KACS を採用し、研究室・実験室で自由な使い方ができる個人持ちのコンピュータ。
- 制御用——セメント、石油精製、ダム処理、交通管理等の小・中規模プロセスに適用し、従来の大型プロセスへも DDC を受け持つサテライト・コンピュータとしても使用可能。

2. ハードウェアの特長

IC 化され高速であり、コマンドにより入出力を本体と非同期に行なえ、また別の計算機本体との接続を可能にする命令体系オーダを備えている。さらに、すべての操作はタイプライタからの会話モードで行なわれ、人と計算機の密接な連絡可能である。

3. ソフトウェアの特長

タイプライタ・オリエンテッドなシステムが用意され、アセンブラは BAP, SAP, コンパイラは FORTRAN があり、ユーティリティも各種用意され、オンライン制御のモニタ、KÖPS が含まれている。



本 会 記 事

○第9回大会

昭和43年12月5日(木)、6日(金)の両日、機械振興会館において開催した。招待講演2件、一般講演60件が行なわれた。とくに、一般講演のうち最後の7件は「漢字処理」のタイトルで講演後、シンポジウムが開かれた〔プログラムの詳細は、本学会誌第9巻6号(43年11月号)を参照のこと〕。参加者500名を越え、盛会であった。なお、今回は電気試験所のご好意により、ETSSの実演が行なわれた。

○情報処理月例会

42年6月以来つぎの通り開催した、

○6月例会(6月26日、於機械振興会館大ホール)

来日中の江崎、M. C. Andrewsの両博士がつぎの件につき講演した(出席者約300名)。

(1) The latest development of advanced electronic computer technology.

(2) The significance, status and trend of data-communications and communication-served D. P. systems.

○7月例会(7月23日、於機械振興会館)

「自動点検システム」につき、戸川隼人氏(航技研)が講演した(出席者35名)。

○8月例会(8月27日、於機械振興会館)

「HITAC 5020のTSS」と題し、高橋延匡氏(日立)が、システム・デザインの話を行なった(出席者60名)。

○9月例会(9月17日、於浜ゴムビル9階ホール)

「ソ連における電子計算機およびIFIP Congress'68」と題し、後藤英一氏(東大)が、6月と9月にそれぞれ行なったソ連とイギリス視察の見聞記を報告した(出席者50名)。

○10月例会(10月15日、於全日通会館会議室)

「Project MAC 滞在記」と題し、佐々木彬夫(電試)が、MITで1年間滞在中の経験の講演を行なった。なお、講演後活発な質疑がかわされた(出席者55名)。

○11月例会(11月11日(月)、於日科技連会議室)

来日中のスウェーデンのChalness大学教授E. Stamme氏の「Computer and computer applications in Sweden」につき、日科技連と講演会を共催した。出席者約30名。なお、講演終了後、3時から約2時間にわたり、スウェーデンと日本の電子計算機の技術につき懇談した。

○研究委員会報告

OLS 研究委員会

(於情報処理開発センター会議室)

43年11月12日(火) 出席者7名

Graphical communication and control languages (by L. G. Roberts, Information Sciences, 1964)につき、坂田委員が報告した。

PL/I 研究会

PL/Iの形式的記述に関する資料の検討を進めている。第2回6月26日より第9回11月15日までの8回の会合で、資料「Informal Introduction to the Abstract Syntax and Interpretation of PL/I」の輪講を終了し、次いで中心的資料である「Abstract Syntax and Interpretation of PL/I」の検討にはいった。

「情報処理」寄稿案内

1. 寄稿手続

- 1.1 寄稿者は原則として本会員に限る。寄稿者が2名以上の連名の場合には、そのうちの少なくとも1名は、本会員であることを必要とする。ただし、編集幹事会において承認されたもの、または編集幹事会が依頼したものは、このかぎりではない。
- 1.2 本会所定の原稿用紙を使用のこと。原稿用紙は申込みがあり次第送付する（本会誌1ページは、本会原稿用紙で約6.5枚である。）。

2. 原稿の種類およびページ数の制限

寄稿の内容は情報処理に関係したもので、読者に何らかの利益を与えるものでなくてはならない。寄稿の種類には以下のものがある。寄稿者は自分の寄稿がどれに当るかを指定することができるが、最終の判定は編集幹事会が行なう。ページ数に関しては、本会では各寄稿種類ごとにページ数を制限することを原則としている。したがって、できるだけ重点のみを強調してこの範囲内に入るようにしていただきたい。

特に有益な原稿で、制限ページ内ではどうしても内容を伝えることが困難であると編集幹事会で判断した場合は、特別に多少の制限超過を認めることもある。なお制限ページに書ききれないからといって1編とすべき内容を2編以上に分けて寄稿することは避けていただきたい。

2.1 論 文

学術および技術に寄与するような新しい研究成果を記述したもので、客観性が高いもの。内容に関する責任は全面的に著者がこれを負う。長さは、刷上り8ページ以内。

2.2 紙上討論

本会誌に掲載された事項に関する討論およびそれに対する原著者の回答。刷上り1ページ以内。

2.4 プログラムのページ

実際に通したことのあるプログラムに限る。もしプログラムを書き換えた場合にはその程度を付記すること。初めに問題および解

法の要旨を日本語で説明し、その次にプログラム言語で記述し、必要ならそのあとに、注（たとえば適用範囲、検算の程度など）をつける。

プログラムおよび計算機によって得られたデータ等はそのまま写真製版することを原則としている。刷上り3ページ以内。

2.5 寄 書

論文とするほどまとまったものではないが、学術および技術に寄与する新しい研究成果または論説、意見、新しく制定された規格、計算機利用のさいに得られた統計的なデータ等会員一般の参考となる資料。刷上り3ページ以内。

2.6 談 話 室

情報処理に関する実際上の問題で、会員に有益と思われる経験談、失敗談など、特に内容に制限はない。刷上り2ページ以内。

2.7 文献紹介

内外の新しい出版物の中で、特に会員の興味を引くと思われるものを紹介、批評または抄録する。紹介したい原著の題目を学会に照会の上寄稿されたい。刷上り0.5ページ以内。

2.8 会員の声

会員相互の連絡や消息、あるいは学会、学会誌、学会の行事（大会など）に対する批判、要望、助言など、刷上り0.5ページ以内。

2.9 ニュース

内外における主なニュースを取り上げる。また各種関連学会や研究会の予定等も加えて掲載する。

3. 論文の体裁とその書き方

論文は特別の場合を除き、標題、あらまし、まえがき、本論およびむすびの順とする。

(1) 標題 日英両文でできるだけ簡潔に、かつ一見してその内容がよく解るように決める。

(2) Abstract 論文の要約を英文で150語以内にまとめて書く。著者の目的、理由、行なった事柄、結論などをそれによって内容が容易に

理解できるようにすることが望ましい。

- (3) 図および表 図および表には、Fig. 1 または Table 1 のように番号を付け、その図や表の内容が本文を参照しなくても理解できるように英文説明を付すこと。
- (4) まえがき まえがきは研究分野においてその論文が占める位置や歴史的背景を述べることを目的とする。したがって従来との関係、研究の特長などを明瞭に述べる必要がある。
- (5) 本論 本論は不必要に長い記述を避け、要点を有効に伝えるように書くことが望ましい。図や表は、できるだけ重複を避けていただきたい。また数式は主題の論旨の展開に必要な程度にとどめ、長い数式の誘導は巻末に付録として書く方がよい。結果を示す数式には文章による解釈を付記した方が読者に理解しやすい。
- (6) むすび 研究結果を検討し、研究目標に対してどこまで到達できたか、またはなし得なかったか、などについて簡単に記述する。なお謝辞もできるだけ簡単なものとする。特定事項についての援助は本文中でまたは脚注で記載した方がはっきりする。
- (7) 付録 長い数式の誘導の過程や、実験装置、計算機についての説明などの詳細が必要な場合、これを本文中に挿入すると論旨が不明瞭になるので付録にする方が読みやすくなる。
- (8) 参考文献 研究内容に直接関係のある重要な文献には必ず言及すること。これら文献に関連のある本文中の箇所には、右肩に参考文献番号を書き、末尾にその文献をまとめて記述する。関連の少ない文献を多くあげるとは望ましくない。
- (9) 用語説明・記号説明
専門用語については、簡単な用語説明を添付することが望ましい。また特に本文中に使用する記号の多いときも同様である。
- (3) 当用漢字、新かなづかいを用いること。
- (4) 数字、ローマ字、ギリシャ文字、記号などは特に明瞭に記載すること。(大文字、小文字、上つき、下つきの別。×(かける)とX(エックス)の別等)
- (5) 句読点は“.”および“,”を用い、それぞれ1画を用いる。
- (6) 本文中に使用する記号は必ず説明を付す。
- (6) 数式は特に印刷に便利のように注意し、ことに文中に式を挿入する場合には a/b , $\exp(t/r)$ のような記法を用いる。
- (8) 独立した数式は、1行につき本文の2行ないし3行分のスペースを取って書く。数式も文の一種であるから、原則として末尾に“,”または“.”を付す。
ただし、プログラム言語の形式を利用する場合には、この限りではない。
- (9) 印刷すべき本文以外の指定や注意書きなどはすべて朱書する。
- (10) 原稿中に後から文章、文字などを挿入する時は、挿入する文章や文字を欄外に明瞭に記し、かつ挿入する箇所をVまたは^ (朱書)で示す。
- (11) 図面は刷上り寸法の2~3倍大にきれいに書き、文字、記号などは明瞭に記入する。図面は本学会でトレースするから鉛筆書きでもよいが、トレースしにくい青焼きのままの図面は避けていただきたい。またフリーハンドを避け定規を使用すること。図中に記入する文字は、斜体、立体の区別をする。なお、線の太さに種類のある場合も指定する。図面を入れる場所は原稿用紙の欄外に明記すること。表はできる限り簡潔に表現し、長い表は途中を省略するか、あるいは、直接製版できる原稿にする。
- (12) 参考文献は原則として、雑誌の場合は著者、標題、雑誌名、巻、号、ページ、年月を、単行本の場合には、著者、書名、ページ、発行所、発行年をこの順にする。
- (1) 山田太郎; 偏微分方程式の数値解法, 情報処理, Vol. 1, No. 1 (1960), pp. 6~10
- (2) J.A. Rajchman; Limitation in Speed and Capacity of Computer Memories. Proc IFIP Congress '62, pp. 636~640.

4. 執筆上の注意

- (1) 寄稿の種類と日英両文による標題、氏名および所属のみを原稿第1ページに、第2ページ以後は本文のみとする。
- (2) 文体はひらがなまじり国語文章体とする。

- (13) 脚注は, *, **, *** などの記号で示し, 本文中そのすぐ下に横線ではさんで記入し, 脚注と朱書する.

文中の記号でイタリック体使用の場合は, その記号の下に ~~~ を朱書する. また太字を使用したいときは, その文字の下に —— またはその文字の上に ~~~ でゴジと指定する.

5. 寄稿原稿の取扱い

- (1) 学会において原稿を受付けたときは, 当日の日付を原稿に押し処理簿に記入し, 受付状を発送する.
- (2) 再受付の場合は“再”として前項に準ずる.
- (3) 掲載の場合には, これらの日付(原受付および最終受付のみ)を本文末尾に記入する.
- (4) 寄稿原稿は論文委員の審査結果に基づき, 編集幹事会でつぎのいずれかに決定する.
 - (a) ただちに採録する.
 - (b) 照会によって著者に軽微な修正などを求めた上, 採録する.
 - (c) 著者に照会して回答または修正などを求めた上, あらためて審査を行なって採否を決定する.
 - (d) 寄稿の種類を変更した方が適当と判定された場合, 著者にその旨照会し, 回答または修正を求めた上で再審査する.
 - (e) 照会を行なっても, 本会誌に掲載するにふさわしい程度に改良の見込みのないと判定された場合は不採録とする.
- (5) 照会は論旨不明の点の是正, 明らかな誤りの訂正, 難解もしくは冗長な記述の書きかえなどを求めることに主眼をおいて行なわれる.
- (6) 不採録に決定した原稿は, 不採録とした理由を付して著者に返却する.
- (7) 照会などの便宜のためコピーを著者の手元に有していることが望ましい.
- (8) 掲載された寄稿の著作権は著者に属する.

- (9) 掲載された論文等については特許法第 30 条第 1 項(実用新案法第 9 条第 1 項において準用する場合を含む)の適用を受ける.

6. その他

- (1) 原稿の送付先
東京都港区芝公園 21 号地1の5 郵便番号105
機械振興会館 314 号 (社) 情報処理学会
- (2) 経費 寄稿に対しては, 編集幹事会が依頼した場合を除き謝礼, 原稿料などは支払わない. また掲載料は不要である.
- (3) 校正 著者にも校正刷りを送り, 誤植の防止には万全を期しているが, 校正のさいに, 原稿, 特に原図面を訂正することは避けて欲しい.
- (4) 正誤 著者から正誤の申し出があった場合, 正誤表を最近号に掲載する.
- (5) 別刷 別刷りはページ数および必要部数に応じて別表* の定価が定められている. したがって必要な場合には著者は校正の時に, 必要部数を明記して注文することとする.
あとの注文に対しては, この表より高価になることをご注意ください.

付 記

会員の寄稿によるほかに編集幹事会が執筆者を選定し, 学会が原稿を依頼して, 会誌に掲載するものとして次のものがある.

- (1) 講座・解説・講演 情報処理に関する基礎的な諸問題についての講座, 新しい技術の動向等についての一般的な解説または, 国内外の情勢等についての諸報告または講演. これらは随時会誌に掲載されるか, または同一分野に属するものをまとめて特集号として会誌に掲載される.
- (2) 報告 国内外の会議等の報告
- (3) 書評 国内外の出版図書の紹介・批評
- (4) 資料 情報処理に関連する諸資料

*「情報処理」別刷価格表

部 数 pp.	100	200	300	400	500
1~ 4	1,300	1,700	2,200	2,700	3,300
5~ 6	2,100	2,700	3,400	4,100	4,900
7~ 8	2,300	3,000	3,800	4,600	5,500
9~10	3,000	3,900	5,000	5,900	6,900
11~12	3,200	4,200	5,300	6,500	7,600